

## 報告書

本研究に多大なるご理解とご支援を賜りました故川上宏先生とご遺族の皆さまに厚く御礼申し上げます。

### 1. 研究題目

海外ボランティアへ向かう心——互惠性と偶然性——

### 2. 研究について

本研究では海外ボランティアにおける利他意識のあり方について明らかにするため、法人Aの協力隊派遣制度で海外ボランティアに参加した方々に半構造化インタビューを行った。

海外ボランティアではどのような活動が行われているのかを聞いた。くわえて、報酬が無くても他者のために自分の時間や労力を使う利他意識がどのように現れているのか、という2つの調査疑問を立てた。

活動経験者に協力を依頼し、ブラジル、モロッコ、グアテマラで活動した4人にインタビューを行った。2023年3月から調査を開始し、対面とZOOMを用いたオンライン上で1時間から1時間半をかけてインタビューを行った。

本研究で分かったことは大きく2つである。

1つ目は海外ボランティアには様々な経験と目的を持った人が応募するということだ。学生時代に多くの国を訪れていた人にとっては、海外で生活することができる点が魅力であった。一方、幼少期の海外での物乞いとの出会いなど強烈な出来事によって教育に関心を持ち始めた人もいた。海外への興味だけから協力隊活動の応募に至ることはない。自分の技術を活かして、現地で活動することができるという協力隊が提供する機会が魅力となって参加を決めていた。

現地での活動は基本的に自分から働きかけなければ、成果を残すことはできないものだ。言語や宗教の壁を超える努力や工夫によって、より多くの知識を残そうという姿勢が見えた。利他行動とは相手の目的達成のために、その目的が自分にとって利益が無いとし

でも、協力することだと定義付けることができるだろう。

2つ目に分かったことは、協力隊活動において互恵性や偶然性が働いていたということだ。調査協力者は、自分の活動以上のものを相手からも受け取ることができたと実感していた（互恵性）。利他は、受け手が利益だと感じたときに作用するという考えのもとで、協力隊員自身にも利益をもたらしていた。それは金銭的な報酬ではなく、特別な経験や様々な人との出会いといった内的報酬に分類されるものであった。

自分にとって利益のないことであっても、自身のスキルを活かして活動することが現地の人に対する利他行動であることは間違いない。また、自分が他者の境遇に生まれてくる可能性があったという偶然性を意識した経験から、利他を考えるようになっていた。幼少期の経験を基盤として、学生時代を通して一貫して他者のために行動したいという気持ちを持ち続けていた。

最後に今後の展望について論じた。本テーマは社会的な利他行動のあり方を考えることにつながる。近年はSDGs（持続可能な開発目標）やCSR（社会的責任）など、自社利益だけでなく環境や人権に配慮した取り組みを行う民間企業が増えている。こうした動きは自分の利益だけではなく、周囲にもその利益を与えるための行動と言える。利他意識を考えることは社会活動の源泉について考えることでもある。深刻化する地球温暖化や異常気象に立ち向かうための姿勢を学び、より多くの他に利益をもたらすことができる行動が求められてくるが本研究はその可能性の一端を論じた。